

かたりきかせ

だるまのむかし



大西屋ときつねのつねきち

上三草

むかしむかしずっとむかし、三草の山の中につねきちというきつねが一匹すんでいました。つねきちは、たいへんなまけものでした。

ある時、つねきちは働き者のうさぎどんに出会いました。

「つねきちちゃん、うちの畑でおいしいものがようさんとれたさかいに、ちょっとやけどいらんか。」

つねきちは、うさぎどんの親切を断ってしまいました。そしてつねきちは心の中で、

「へーんだ。わいはうさぎどんみたいに働かんでも、おいしいもんはいつでも食べられるねんから。」

と、思っていました。働かないつねきちがどうしておいしいものが食べられるかという、つねきちは

化けるのが得意なので、両足をそろえてピョンととびあがり、クルンクルンクルンと回ると、こわいおばけや鬼に化けて、村の人たちをびっくりさせては、その間に食べ物を取って逃げていました。

けれどもそのうちに村の

人たちも慣れてきて、お化

けや鬼に化けても、

「はーん、つねきちやな。

こらっ。」

と、あべこべに叱られて何

も取らずにびっくりして逃

げるようになりました。

「ああ、はらへった。死にそうや。」

つねきちは何日も食べていないのでおながぺこぺこです。

「おいしいごっと、はらいっぱいくいたいなあ。」

つねきちは、ずずずずずと、音をたててよだれをすきました。とうとうしんぼうができなくなって、な



まけものつねきちも、食べ物をさがしにとぼとぼと三草の村の方へと歩き出しました。するとどこからともなくおいしそうなおいがしてきて、はらぺこのつねきちはずずーごっくん、ずずーごっくんと、何回もよだれをのみこみました。

おいにひきつけられてつねきちがやって来たのは、三草橋の所にある大西屋というやどやでした。

つねきちはその大西屋というやどやの前で立ちどまると、

「どないしてはいるうかな。きつねのままやったら入れてくれへんし、どないしよう。」

つねきちは大西屋を見上げて考えました。

「そうや、化けたろう。何がええかいなあ。」

つねきちは、頭をかしげて一生懸命考えているうちに、いいことを思いつきました。

「ここは人間がとまるところやから、若い男の人に化けて、とめてもらおう。」

つねきちはピョンととびあがり、クルンクルンクルリ

ンと回ると人間にはやがわり、さっそく大西屋に入りました。

「こんばんわ、とめてくれるかい。」

と、すまして言いました。やどやの人はきつねだなんて知りませんから、

「はいはい、お客はどうぞどうぞ。」

と、部屋に入れてもらってすまして座っているつねきちの前へ、次々とごちそうが運びこまれてきました。

「うわあ、うまそうなごつとやなあ。こんなひさしぶりや。」

つねきちは人間に化けているのも忘れて、まっぴりしたとばかりに手づかみで、むしゃらむしゃらと食べはじめました。やどやの人は変な顔をしましたが、つねきちは食べ続けました。

「ああよう食べた。もう動かれへん。腹がはれつし
そうや。」

そう言ったとたん、ぽんぽんにふくれたつねきちの

おなかの皮が少しずつやぶれてきたではありませんか。

「いたっ、あいたたっ。いてっ、いっててっで。」

あまりの痛さにころげばころがるほど、おなかのやぶれたところは広がっていきます。そしてやぶれたところから、だんだんもとのきつねの姿にもどっていくのでした。

「えらいこっちゃ、化けとったことがばれてしまう。はよ逃げよう。」

つねきちはやどやの人に見つかからないように、痛いおなかをかかえて、山の中へ帰っていきました。

山についたころには、きつねの姿にもどっていました。でもふくれたおなかはもとにもどらないし、おなかの痛いのも直りません。

「えーんえーん、いたいよおー。」

泣きながら、たぬきのお医者さんのためえもん先生のところへいききました。

「どないしたんや、そのふくれたおなか。ちょっと見たろう。」

たぬえもん先生は、つねきちのおなかをそっとおさえってみました。

「おい、こりゃえらいこっちゃで。さてはわしのようなたぬきになるうと思つて、化けそこのうたんやろ。こんな大きなおなかは切らんと直らへんな。そこに横になってみい。」

たぬえもん先生はぴかぴか光った大きなはさみを取り出して、つねきちのおなかを切ろうとしました。つねきはびっくりして、

「先生、ちがうねん ちがうねん。化けそこのうて、こんなおなかになつたんとちがうねん。」

何を言つても、たぬえもん先生はつねきちのおなかを切ろうとします。つねきはおなかを切られてはたまりません。まっさおになつて、

「あいたた あいたた。やっぱり人をだましたばちがあたつたのかな。」

と、痛いおなかをおさえながらあわてて逃げていき
ました。

つねきちがいなくなったあと、たぬえもん先生は、
「わっはっはっはっは、あんななまけもんが腹いっ
ぱいごつとを食べられるはずがない。きつと、どこぞ
でぬすんで食べたにきまつとる。しばらく腹いたは
直らんやろうけど、悪いことしたんやからしゃあな
い。これにこりてもうせえへんやろう。」
たぬえもん先生は、もう一回大きな声で、

「わっはっはっはっは。」
と、笑いました。

いちえもんさんのおかゆ

木梨

むかしむかし、木梨という村にみんなから、いちえもんさんと呼ばれている、大熊の市右衛門という人が住んでいました。いちえもんさんの家はとても大きな家で、灰倉、ほしか倉、綿倉、みそ倉、米倉、西倉、奥倉などたくさんのお屋敷がずらっと並んでいました。お屋敷にはたくさんのおとこしやおなごしが働いていました。

毎年秋になって、お米がとれるころになると、村の人たちはいちえもんさんのお屋敷へ、年貢をおさめにやってくるのでした。家でとれたお米をわらであんだ俵に入れて、荷車に積んで引いて来るのです。

「おい百太郎いくぞ。」

おじいさんに声をかけられて百太郎は、

「あいよ。」

と、元気よく返事をして荷車の後押しをします。

「よいしょよいしょ よいしょよいしょ。」

米俵を積んだ車はとても重いので、でこぼこの山道になってくると、なかなか前へ進みません。おじいさんも百太郎も汗だくです。

「よいしょよいしょ よっこ

らしょ、よいしょよいしょ

うんとこしょ。」

その様子を山のいたちの兵吉が見ていました。

「重たそうだな。手伝ってあげよう。」

と、

ちよこちよこちよこ

とでできて、百太郎の後を押し

てくれました。

「やあ兵吉、おおきに。」

「よいしょよいしょ よっこらしょ、よいしょよいし



よ うんとこしょ。」

その声をたぬきの豆吉が聞きつけて、

「重たそうだな。手伝ってあげよう。」

と、とこととこ とでてきて、いたちの兵吉の後ろを押してくれました。

「やあ、豆吉も押してくれるのか。助かるよ。」

「よいしょよいしょ よっこらしよ、よいしょよいし

よ うんとこしょ。よいしょよいしょ よっこらしよ、

よいしょよいしょ うんとこしょ。」

みんなで押していきました。いっちょもんさんのお屋敷の近くまでくると、

「ああやれやれ、おかげで助かったよ。兵吉に豆吉すまなんだなあ、おおきに。」

と、おじいさんがお礼を言いました。百太郎も、

「兵吉 豆吉、おおきに。」

と、お礼をいいました。

いっちょもんさんは、帳場で勘定づけをしながら、年貢をおさめにくる人に、

「ごくろうさん、ごくろうさん。」

と、ねぎらいのことはをかけていました。おじいさんと百太郎が入っていくと、

「やあ ごくろはん。おまはんとこは、今年はどうでけたなあ。」

「へえ、おかげさんで。」

「去年はどないやったかいなあ。そうやそうや、去年は不作でえらいこっちゃったんやなあ。そんなら今年は、一俵家へ持って帰れ。」

「ええ、ほんまでっか、助かります。おおきに。」

「おっ百太郎もきとったんか。ごくろはんやったなあ。ちよっとこっちにおいで。」

いっちょもんさんはそう言うと、おじいさんの後ろにかくれるようにしていた百太郎に、おいしそうなおまんじゅうをくださいました。

「おおきに。」

百太郎はとびあがるほどうれしくて、ぶるぶるかいていた汗が、すっと引いていくように思いました。

「うまそうやなあ。おいらひとりで食べたらもったいない。兵吉や豆吉にもわけたろう。」

と、帰りの山道でおじいさん、豆吉、兵吉、百太郎の四人でおまんじゅうをわけ合って食べました。

「うふふ、うまいなあ。」

「うん、おいしいなあ。」

「こんなうまいもん食べたんはじめてや。」

みんなは顔を見合わせて、にっこりしました。

そんなある年のことです。雨がひとつも降らずお

天気ばかりで、田んぼの稲や野菜が枯れてしまい、

お米が一粒もとれず、ききんに陥りました。

「あーんあーん、おなかがすいたよう、何か食べた
いよう。」

と、泣いても何も食べることができないのです。百太郎の家でも食べるものがなんにもなくなり困って
いました。山のいたちの兵吉やたぬきの豆吉も、

「おなかがすいたよう。」

「何か食べたいよう。」

と、うろろうろしていました。草の葉っぱや木の根っこをかじったりしました。おなかがすきすぎて、倒れたり病気になったりする人がたくさんでました。

「困ったことになったぞ。何とかしてみんなを助ける方法はないもんやるか。」

と、木梨のいっちょもんさんは、いろいろ考えました。

「倉にあるのはわずかばかりの米とさつまいも。そうや、これで芋がゆをたこう。」

いっちょもんさんは、さっそく倉から大きな大きなおかまを出させ、山から枯木や枯枝を集めてきて、たき木をたくさん作りしました。庭に大きなおかまをすえつけて、たき木を燃やし、大きなおかまいっぱいに、芋がゆをたきはじめました。

はじめちよろちよろ中ぱっぱ、ぱちぱちごおーつと燃えてきて、ぐつぐつぐつぐつ煮えてきて、ぶくぶくぶくぶく泡ふいて、その泡がふきこぼれないよう大きなおかまのふたとって、じっくりじっくりたたくのです。やがて、ほんぐほんぐ ほんぐほんぐ

ゆげがでて、ふんわかほわーんとお芋のいいにおいがあたり一面にただよいました。

「さあ、えんりよのう食べておくれ。」

おなかのすいている人たちにとって、どんなにありがたかったことでしょう。

「おい、木梨のいっちょもんさんとこへいけば、芋がゆを食べさせてもらえるそうな。」

「えっ、ほんまかいな、ありがたいなあ。」

「わしも食べさせてもらいにいってもええやろか。」

「うちもいってよばれてこよう。」

「おいらもいってこよう。」

と、おおぜいの人が次から次へとやってきました。

百太郎もおじいさんと一緒にやってきました。おいしそうなお芋のにおいをかぎつけて、いたちの兵吉とたぬきの豆吉もやってきました。

「いただきます。」

「ああ、なんてうまいんだらう。」

「うーん うまい。」

芋がゆに舌づつみをうちながら百太郎は、

「ほんまにいっちょもんさんはえらい人やなあ。おいらも大きくなったら、いっちょもんさんみたいに弱い人や、困っている人を助ける親切で立派な人になろう。」

と、思うのでした。

木梨いっちょもんさんの かゆたく音は

はじめちよろちよろ 中ぱっぱ

ぱちぱちごおーっと 燃えてきて

ぐつぐつぐつぐつ 煮えてきて

ぶくぶくぶくぶく 泡ふいて

ほんぐほんぐ ほんぐほんぐ ゆげがでて

ふんわかほわーんと いいにおい

こうして心の広いいっちょもんさんのおかげで、

おおぜいの人たちが、苦しいききんをのりこえることができたということです。今でも、

「木梨いっちょもんさんのかゆたく音は、一里聞こえて二里ひびく。木梨いっちょもんさんのかゆたく音は、一里聞こえて二里ひびく。」
と、言い伝えられています。

つるべおとし

牧野

むかし むかし、三草の牧野というところに伝わるお話です。

牧野には、いたるところに青々した草がおい茂りその草原には たくさん馬があちらにもこちらにも放されて、それはそれはのどかな村でした。

その村はずれの こんもり茂った森のなかに、遠くからでもよく見える一本の太い大きな松の木がありました。そのあたりには 古い木がたくさんおい茂っており、昼間でもうす暗いところでした。その木の枝々のすきまから、小さな茅ぶきのお堂が、かすかに見えました。このお堂には、大切な村の鎮守さまがおまつりしてあって、村の人々はよくこの

お堂におまいりにきていました。

そのお堂の近くに、おさとばあさんの家がありました。おさとばあさんには 二人の孫がいました。

兄を太郎吉、弟を次郎吉といました。太郎吉も次郎吉もおばあさんが大好きで、いつもいっしょに寝ていました。

「おはよう 太郎吉、次郎吉、よう寝たか。きょうもええ天気やで、どうれ ふとんをたたんで と、あれ まあ、ふとんがびしょびしょやないか。誰や太郎吉かいな。」

「ちがうちがう、ぼくとちがうでえ。次郎吉や。」

「これ 次郎吉、もう五つにもなって まだおねしよしてからに。」

「かんにんかんにん、おばあちゃん そないおころんとってえなあ。」

「両手を頭にのせて逃げまわる次郎吉をみて おばあさんは、

「しゃあないなあ。そんならおばあちゃんが次郎吉のおねしょが治るよう 鎮守さまにおねがいしてきただげるさかいなあ。」

おさとばあさんは、一日の仕事をすませて 夕方近くなると 米粒を小さな袋に入れて、鎮守さままでおまいりにいきました。

おさとばあさんの年は七十才。でも、とても働き者で まだ腰も

ぴーんとのびています。

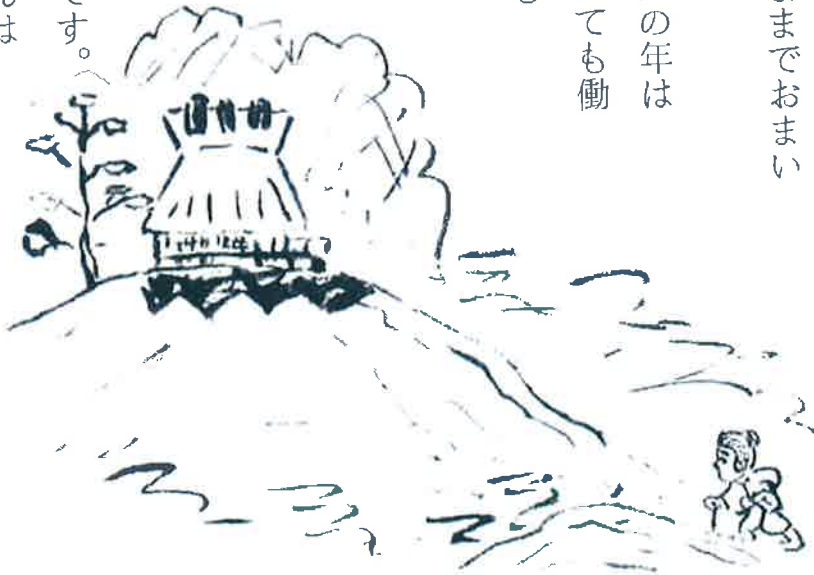
でも、ちょっと

目が悪くなっ

てきて 遠く

のものが少しかすんで見えるのです。

おさとばあさんは



お堂につくと、草履をきちんと揃えて お堂にあがりました。そして 袋からお米をだしてお供えをすると、両手をポンポンとたたいて ていねいにお礼をして、

「鎮守さま、どうか孫の次郎吉のおねしょを治しておくんはなれ。それから わしのこの目もよう見えるように頼みます。」

おばあさんは、お願いが終わったので帰ろうとして、さっき脱いだ草履をはこうとしました。けれど も 草履がありません。

「こらかなんなあ。さっき脱いだとこやのに、犬でもくわえていったんやろか。それにしてもおかしなことがあるもんや。」

と、ひとりぶつぶついいながら あたりをきよろきよろ見わたすと、さっきのお願いがもうきいてもらえたのか 遠くのほうまでよく見えてきました。

そして、もっと目をこらしてみると、お堂のまわりのうす暗い林の間に 何か光っている玉みたいなの

ものが見えました。こっちにも二つ あっちにも二つ 二つならんだ青い玉が少しずつ動いています。

しかも、おさとばあさんのほうに ずんずん近づいてくるではありませんか。

おさとばあさんは、冷たい水でもあびせられたように ぞっ、と、しました。

「た、たすけてくれえ。」

と、大きな声をだして、はだしのままあわててにげて帰りました。

次の日、おさとばあさんから話を聞いた隣の六兵衛じいさんは、

「そんなことはないじゃろが。そんなら今度は、わしがおまいりしてくるからなあ。」

と、その夕方近く お堂におまいりにいってみました。

六兵衛じいさんは、きちんとていねいに 草履を揃えてお堂に上がり、お礼をして鎮守さまにお祈り

をしました。

そして、さて 帰ろうとしましたが、おさとばあさんのいったとおり さっき脱いだ草履がもうありません。六兵衛じいさんは、腰をかがめてお堂の下をのぞきこんだり まわりの草むらをくまなく探しましたが、鼻緒一本とて見つかりませんでした。

そして、あたりをきよろきよろ見わたしていたら、ふいに上から松葉が束になって しゅるしゅるしゅるしゅると、まるで忍者の手り剣のように落ちてきました。

とっさに 六兵衛じいさんは、あたったら大変と、着物で頭をかくして四つんばいになって ちぢこまってしまうました。

「ぶるぶる、さては忍者がおるのかな。早く逃げなけりゃ。」

六兵衛じいさんは、はだしのまま すっとなで逃げて帰りました。

そして、六兵衛じいさんは、息をきらしながら

おさとばあさんの家にとびこみました。

「お、お、おさとさん。あんたのいうたとおり 鎮守さまには何かがおるで。」

「そうだしやろ。わてはな、二つ並んだ青い玉をみたんや。あれはな、きつとへびの主でも住みついとるんやないかと思うけどな。」

「いや、わしは忍者がかくれとるように思うけどなあ。」

「うす気味悪いなあ。」

おもいおもいの想像をしながらも、それが何であるのか その正体をぜひ確かめてみたくなりました。

そこで、村の人たちを集めて、おさとばあさんと六兵衛じいさんは、鎮守さまであったことを くまなく話しました。

そして、話を聞き終わったあと、村中あげてその正体をつかむ方法を考えました。

そのまた 次の日の夕暮れ、いつものように お

さとばあさんがおまいりする後を、数人の村人たちが こっそりつけていくことになりました。

おさとばあさんは、この間のことを思い出すと つい足がすくんでしまつて、出す足がぶるぶるふるえています。

でも、気をしずめなければと、

「えっへん！」

と、大きなせきばらいをして ゆっくりと下駄を揃え その下駄の上に子どもの頭ほどの石をのせて

「もうこれで大丈夫じゃろう。こんな重たい石ののけてまで 下駄をもっていくこともあるまい。」

と、つぶやきました。そのようすを見届けた村人たちは、すばやくお堂をとり囲むようにして、草むらに身をかくしました。おさとばあさんは手をあわせ 静かにお祈りをはじめました。

みんなの目は くいいるように下駄をみつめています。

その時です。何やら黒い影が突然、高い松の木
あたりから 目もとまらぬ速さでお堂に近づくと、
「あーっ。」

と、いう間もなく おさとばあさんの下駄といっし
よに、その黒い影も消えてしまったのです。影とい
っていいのか 光とっていいのか、あまりの速さ
に人々はびっくり仰天。

「目がぎらっと光ったぞ。」

「まっ黒で、毛むくじゃらやった。」

「ありゃ、お化けかいな。」

何日も 何日もその話で村中もちきりでした。そ
のことを聞いたもの知りのおじいさんが、

「それはきつと、つるべ落としにちがいない。」

「つるべ落としは何やいな。」

「つるべ落としというのはなあ、古い大きな木に住
む化けものが ものすごい速さで落ちてくることを
いうんじゃよ。」

と、話して聞かせました。

それから間もなく、村人たちは、このうす気味悪
い木を 切り倒してしまったということです。

だから もちろんのこと それ以来このようなこ
とは、二度とおこらなかつたということなのです。

親孝行なおふさ

上三草

むかし むかし、上三草にとても心のやさしい女の子がいました。名前をおふさといいました。おふさの今のお父さんお母さんには、子どもがいなかった。おふさが六つになった時、社から子どもにきたのです。

上三草のおふさの家は、山も田んぼもなくとても貧乏だったので、おふさは小さな頃から近所の定右衛門さんという人の家で、子守りをして働いていました。その仕事のひまをみつければ、定右衛門さんのお許しをもらって、お父さんお母さんの手伝いもよくしていました。

おふさの家の前の道は、京都へ旅する人たちがよく通る道です。そのころ、旅人はわらじやぞうりをはいて、旅をしていました。そこで、お父さんはい事を思いつきました。

「そうじゃ、旅人のためにわらじを作れば、売れるかも知れんな。」

「そんなら、私がわらを打ちましよう。」

次の日から、早速わらを集めてきて、わらじ作りを始めました。そのそばで、おふさが小さな手に重い槌を振りあげて、わらをトントン、トントン打って、お父さんの手助けをしていました。

「おふさ、そんなに重い槌を持ってはしんどいじゃろう。」

「いいえお父さん、お父さんこそわらじを作るのは大変でしょう。」

と、話しながら、いくつもいくつもわらじが出来上がっていきました。出来たわらじは、お母さんとおふさが売りました。

「わらじはどうですか？ はきごこちのいいわらじですよ。」

「ひとつもらうよ。ちょうどはな緒が切れて困っていたところなんや。」

「ありがとうございます。」

「わしもひとつもらうよ。途中で切れてしもうたら困るからな。」

「はい、どうぞ。お気をつけて。」

「お母さん、きょうはよう売れて良かったねえ。」

と、二人はよろこび合いました。

おふさの家には山がなかったので、お父さんはうんと遠くの三草山あたりまで出かけ、それも山の奥深く柴を刈りに行くのです。

ある日のこと、山へ行ったお父さんが、暗くなくても帰ってきません。お母さんもおふさも心配になって、近所の人と一緒に、お父さんがいつも行く三草山あたりまで捜しに行きました。

「お父さーん、どこですか？」

「お父さーん。」

大きな声で呼んでも呼んでも返事がありません。

「おーい、茂兵衛さーん。どこじゃー。」

村の人たちも、何度も何度も呼びながら、山の奥深く入って行くと、やっと細い返事がかえってききました。

「おふさー、ここだよー。」

「あっ、お父さんの声や。すぐ行きますからねー。」

あたりは暗くはつきり見えないけれど、かすかな声をたよりにさらに奥深く入って行くと、小さな木の切り株に、頭をたれて疲れ果てたお父さんの姿が見えました。

「あゝ お父さん。」



背中にはたくさん柴がのっけていて、肩にはひもがくい込んで痛そうです。

「お父さん、心配しましたよ。無事でよかったですね。」

「ああ、おふさ。こんなに遠くまでよく捜しに来てくれたなあ。」

「村の人たちも、一生懸命捜して下さったのですよ。みなさんにも、心配かけましたなあ。おかげで助かりました。有難うございました。」

こんな事があってから、おふさはお父さんが山へ行った時は、子守りをしながら遠くまでお父さんを迎えに行くようになりました。お父さんは、おふさのやさしい心を思うと、疲れもとれてしまうのでした。

又、おふさは、定右衛門さんの家でも一生懸命仕事をしていました。ある時のこと、おふさが台所を片付けていると、たくさんのご飯が流しにこぼれていました。

「ああ、こんなことをしてはもったいない。ばちが当たるわ。」

昔は今とちがって食べるお米もたくさんありません。そこで、おふさはお箸でご飯粒を一つ一つ拾い集めて、それを洗って日に干して、それをご飯のかわりに食べました。そんなおふさの姿を見て、村の人たちは、

「若いのに、なかなか感心じゃな。」

「あんなに物を大事にする子は少ないなあ。」
と、口々にほめていました。

その年の暮れの事です。年をとったお父さんが、病気で寝こんでしまったので、おふさは定右衛門さんのお許しをもらって、毎日のように夜道を看病に帰りました。お父さんはおふさに向かって、

「おふさよ、せっかく子どもとして来てもらうたが、この家が貧乏なので小さな頃から働かせて、えらい目にあわせたなあ。でも、ひとことも小言を言わず、

よく働いてくれた。こうして毎日世話をしてくれるおまえを見ると、本当に有難いと思うているよ。これから先、おまえが幸せになるよう、神様に祈りしているからなあ。」

と、涙を流して言いました。

それから間もなく、お父さんは亡くなってしまいました。一人暮らしになってしまったお母さんは、綿をつむぐ仕事をしていましたが、年をとっているので思うように仕事も出来ません。おふさは働いていただいたお金はほとんど使わず、お母さんに渡していましたが、お母さんが病気をするようになってからは、ますますたくさんのお金がいるようになりました。そこで、いくらもないおふさの着物を売っては、そのお金で薬を買って飲ませてあげました。おふさは、病気をしますます小さくなったお母さんの背中をさすりながら言いました。

「お母さん、ここは痛うないですか。大丈夫ですか。」

「おふさや、いつもすまないねえ。」

「いいえ、それよりお母さん早う元気になってくださいね。」

おふさは、朝晩定右衛門さんの家から走って帰り、お母さんの食事の支度をしたり、身のまわりの世話をしてあげました。」

いつもお父さんお母さんを思い、親を大切にする親孝行なおふさのうわさは、三草だけでなく江戸まで広まりました。亡くなったお父さんが、一心にお祈りをして下さったせいでしょうか、なかなか感心な孝行娘だということ、えらいお殿様が

おふさにごほうびを下さることになったのです。」

「そちの名前は何と申す。」



「はい、三草村のおふさと申します。」

「そなたは、もらわれてきた子どもにもかかわらず、本当の娘以上に親を大切にしている心、あっぱれじゃ。ここに金拾両をほうびとしてつかわす。好きなように使うがよい。」

「ああ、有難うございます。」

拾両というお金は、この頃の人たちにとってはびっくりするくらいたくさんのお金でした。家に帰ったおふさは、嬉しさのあまりお母さんと抱きあってよろこびました。そして大切なお金をどうやって使ったらいいか、親せきの人たちも集まってみんなで相談しました。

「わしは、もうこの家が古うなっているので、そのお金で家を建て直してはどうかと思うがなあ。」
と、言う人もあれば、

「わたしは、おふさがお母さんのために着物をみんな売ってしもうたと聞いて、ふびんに思うとった。

この際、おふさの好きな着物を買ってやりたいなあ。」

「それもそうじゃが、みなさんよく考えておくれ。今は米が少のうて困つとる。そこで、田んぼを買えば、これからはどっさり米がとれて、食うに困ることとはのうなると思うんじゃがな。」

「うーん、なるほど。先のことを考えると、ごほうびの金はやっぱり田んぼを買うのが一番じゃな。」
という事で、広さ約一反半の田んぼを買うことになりました。

「孝行娘のおふさが、いただいたごほうびのお金で買った田んぼなので、その田んぼを、孝行田と呼ぶようになりました。」

又、このような孝行娘がいたということは、次から次へと語りつがれ、孝行田のあるそばには、「孝女ふさの碑」という、立派な石碑が立てられています。

子 安 地 蔵

木 梨

むかし、むかし、木梨という村に、それはそれは仲良しで働き者の夫婦が、幸せに暮らしていました。幸せなこの二人にも、一つだけ悩みがあったのです。それは子どもがいないことでした。

二人はいつも、

「よくな事は言わん。男の子でも女の子でもいいから、一人だけ子どもがほしいものじゃのう。」と話していました。

「どうか子どもをお授け下さいませ。」

毎朝、二人は一生懸命おいのりをしました。そして東の方のお寺へお参りすると良い、と聞くと早速でかけ、西の方の神様がよくかなえて下さると聞くと、西の方へとでかけて行き、一心にお祈りをするので

した。

でも、いくらお祈りをして、すこしも、赤ん坊の出来るきざしがありません。

「どうしても私達夫婦には、赤ん坊が恵まれへんのやろか。」

と、おときさんは、すっかりしずんでしまいました。

心のやさしいけんすけどんは、そんなおときさんをみるのがとってもつらかったです。けんすけどんは、村中で一番のものしりといわれる、おはつばあさんの所へ、相談に出かけました。

「あーおはつばあさん、なんでもおはつばあさんに聞いたらよう知っとなってやいうことやさかい、ええ知恵かしてんか。」

「なんや、けんすけどん、うっとうしい顔してどないしたんや。」

「あのおなあ、わしら夫婦にはちっとも子どもができんや。おときもこのごろすっかりしけこんでしもうてなあー。なんとかならんやろうか。」

「あのなあ、木梨の原坂に、昔からお地藏さまがあつたんや。なんでもようねがい事きいてくれてやそ
うや。ひとつだまされた思っておまいりしてみいな。」

この話をきいて、早速二人は原坂へ出かけて行きました。原坂は、草がぼうぼうと茂って、おはつばあさんにきいてきたお地藏さまが見あたりません。けんすけどんとおときさんは、汗びっしょりになって、かまで草をかりました。

「あ、おとき、これや、これやがな、おはつばあさんがおしえてくれたつたお地藏さまや。」

そういいながらまわりをきれいにさしあげました。

「まあほんまや、えらい草にうずもれて。」

それから、毎日毎日熱いお茶をもってお参りしました。でも、やっぱり赤ん坊は生まれません。

「あんた、こんどもあかんみたいや。お地藏さんも言う事きいてくれてないわ。」

「ほんまにどないしたらええねんやろう。」

と、二人はがっかりしていました。

ちようどそこへ、村一番のおとしよりといわれるおこうさんが通りかかったのです。

「あんたら二人どないしたんや、そんなにうかん顔して。」

「あのなあ、わしら夫婦にどないしても子どもがで
きんのんや、原坂のお地藏さまにもたのんだんやけどあかんねん。」

「けんすけどん、おときさん、あのお地藏さまを赤ん坊やと思って抱いてねてみい。きっとよう言う事きいてくれてやそうな。」

と、おしえてくださいました。この事をきいた二人は、あくる朝暗いうちに原坂へ出かけ、大切に大切に

お地藏さまをかりてかえってきました。そして、その夜からおときさんはまるで自分の子どものように、やさしく子守歌をうたったりお話をきかせたりしながら抱いてねむったのです。けんすけどんは、「どうか赤ん坊をおさずけ下さい。お願いします。」

と、一生懸命いのりつづけただのです。



何日位たったでしようか。

「あんた、どうも赤ん坊ができたみたい。」

「えっ、ほんまか、夢とちがうか。」

けんすけどんは自分のほっぺをつねってみました。

「いってえ、ほんまやほんまや。お地藏さまのお
かげじゃ、おかげじゃ。」

と言って、大喜びでお地藏さまを原坂へお返しし、
毎日毎日、朝に晩にお参りをつづけたのでした。

おときさんのお腹は、一日一日と大きくなって
きました。けんすけどんは、おときさんのお腹をみ
てはうれしそうに、

「おとき、だいじにしいや、ころんだらあかんで。」
と、やさしくいたわるのでした。

やがて、玉のような元気な赤ん坊が生まれたので
す。けんすけどんは、天にもものぼらんばかりの喜び
ようでした。赤ん坊も、日に日にすくすく育ってい
きました。

「お地藏さま、ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

けんすけどんとおときさんは、あの人通りの少な
い原坂ではお地藏さまがさみしかろうと話し合い、
早速近くの石やさんにおねがいして、かわいいお地
蔵さまをもう一体作ってもらいました。おときさん
は赤いよだれかけを作り、大切におまつりしました。

この話をきいて、二体並んだ原坂のお地藏さまに、

毎日毎日、朝に晩にお参りをつづけたのでした。

この話をきいて、二休並入た房坊のお地蔵さまに

遠くから子どものほしい夫婦がお参りにきて、お地蔵さまをかりてかえり、次々と子宝にめぐまれたという事です。

村の人々は、このお地蔵さまのことを、いつのころからか子安地蔵とよぶようになりました。

蛇
こ
ろ
び

藤
田

むかし むかしのことです。

摂津の国 昆陽の池のそばを、西国巡礼のお遍路
さんが通りかかりました。

春のお日さまの光をいっぱい受け、水の面はキラ
キラと虹のような不思議な色に輝いていました。

お遍路さんは、あまりの美しさに思わず足をとめ
て、すいこまれるように池を見つめていました。

と、その時、

「もしもし、もしもし。」

人の声にふと振り向くと、そこには、うすみどり
色の着物を着た美しい娘が立っていました。娘は弱
々しい声で言いました。

「もし、あなたはどちらへ行かれるのですか。」

「私は、今から播磨の国の清水寺へおまいりに行く
ところですよ。」

「それならばどうか、播磨の藤田というところまで、
この文箱を届けていただけませんか。藤田には、將軍
満仲公が築かれた多田池という大きな池があります
からすぐにわかります。」

と、言いました。

「あっ、ちょっと藤田のどこへ……。」

お遍路さんが聞き返そうとしましたが、娘の姿は
どこにも見あたりません。

「はて、あの娘さんはどこへ行ってしまったのか。

不思議なことがあるもんだ。しかたがない。この文
箱、藤田というところまで持って行くことにしよう。」

そう言って、荷物の中に文箱を入れ、清水寺めざし
て歩いて行きました。

そして、お遍路さんは播磨清水寺へおまいりをす
ませ、鴨川の村を通り三草村を過ぎ、多田池の場所

をたずねて、やっと藤田にたどりつきました。

「藤田についたものの、困ったなあ。この手紙 誰に渡してよいものやら。」

途方にくれてお遍路さんは、多田池の堤に腰をおろして考えあぐんでいました。

「そうだ、文箱をあけてみよう。中の手紙にあて名が書いてあるかもしれん。」

お遍路さんは、固く固く結んであったひもを、ていねいにほどいて、そうっとふたをとりました。

「あっ。」

おどろいたひょうしに、思わず文箱を落としてしまいました。文箱の中には手紙ではなく、小さな蛇が入っていたのです。

蛇は、シュルシュルとはったと思うと、池の中に入ってしまった。

「さては、あの娘は蛇女だったのかもしれない。」

と、今までの出来ごとを詳しく村人に話して、お遍路さんは法華山の方へ行きました。

それから、長い長い年月がたちました。

いつの頃からか、多田池のそばのお堂へおまいりに行った人が帰ってこない。といううわさが広がり、池のほとりを通る人さえなくなってきました。

「おい、聞いたか。多田池のお堂へ行って鐘をついたら、青い大蛇が出て来て人を飲み込んでしまうそうやないか。」

「うん、聞いたぞ。せやけど、そんな大きな蛇がおるはずないやろ。」

「どうや、ほんまかどうか、確かめてみようやないか。」

「ようし、ほんならひとつ行ってみよか。」

勇敢な若者数人が、お堂へ行ってためしに「ゴーン」と、鐘をつきました。

しばらくすると、池の表面がザワザワと波だち、ザーと水がふき上がったかと思うと、青い大蛇がお堂めがけておよいできました。

「おい、あれみてみ、蛇や。」

「あかん、はよう逃げろ。」

若者たちは、命からがら逃げ帰りました。あまりの恐ろしさにしばらくは口もきけず、腰がぬけて歩けなくなったそうです。

さて、これを聞いた藤田三郎太夫というさむらいが、

「よし、私とその蛇を退治してやろう。」

と、家来の者たちにわらを集めて来させました。そして、わら人形を作りました。わら人形のおなかの中には、火薬をつめたひょうたんを入れました。

わら人形と弓矢を持った三郎太夫は、お堂の前まで行くと、

「さあ、大蛇、来るなら来い。」

と、わら人形をお堂の前にたて「ゴーン」と一ツ鐘をつくと、さっとものかげにかくれ、じつとうかがっていました。

ザワザワザワ、ザーと、水がふきあがり、大蛇が姿を現しました。

ヒュルヒュル、もえるような舌を出したかと思うと、いっきにその人形を飲み込んでしまいました。

とたん、

『ドカーン』

火薬が爆発し、大蛇は苦しみのあまり、ごろごろと大きな丸太でもころがすように、のたうちまわり、あたりの木や草をなぎ倒しました。

そして、『バシッ』

と、しっぽの一げきで多田池の土手を切ってしまいました。水はどうーと下の方に流れていきました。

「たいへんやー。多田池が切れたぞ。」

「にげる、にげる、みんなはようにげる。」

「おかあちゃんーたすけてー。」

付近の村々は、天と地をひっくり返したような大さわぎになりました。

「神さまどうかお助け下さい。村人たちをお助け下さい。」

神主さまが一念こめてお祈りしました。

するとうでしよう。

「あっ、水が東へ向いて流れだした。」

「ほんまや、西から東へ流れよる、助かった、助かった。神主さんのおかげや。」

「神主さん、おおきにおおきに、神さまありがとう
ございました。」

不思議なことがあるもので、西に流れていた水が東に流れ、村人たちは助かったのです。そして、三郎太夫は尚も苦しんでいる大蛇にとどめをさそうと、一の矢、二の矢と射つづけ、やっと、鳥居というところで七の矢で射とめました。

苦しみのたうちまわって、たくさんの血を流したところは、蛇ころびと名づけられ、今でも一本の木も生えていません。また、水をさかさまに流し、村を洪水から守ったというなごりが、さかさま川であると言われています。



一の瀬地藏

一の瀬

むかし むかし、三草橋を渡って右へ進めば、清水寺を経て丹波路から京の都へと、道が続いていました。

この道は「丹波みち」と呼ばれ、西の国から京の都へ行く、大切な街道となっていました。

その街道の陣屋の大手門あたりは、みごとな松並木が続き、旅をする人たちは、この松並木に腰を下ろして川を見ながら、汗を拭いて疲れた身体を休めました。この街道をさらにすすんでいくと、だんだん細く険しい山道が続きます。風に吹かれて木々がすれ合う音と、せみが、ミーン ミーン ミーン、ジイー ジイー ジイー と鳴く以外は、何も聞こえません。



ある日、この道を急ぐ一人の旅人がありました。この人は呉服屋のだんなさん。今日も京の都へ、着物をたくさん買いに行く途中なのです。

「さあ、京へ行って、着物をどっさり仕入れてきましょう。京へいったら、いい柄の着物があるからなあ。よう売れて商売繁昌や。うれしや、うれし。」

ふりわけ荷物を肩にかけ、ふところにはお金をいっぱい入れていました。

「日暮れまでにこの山を越えて、次の宿屋に泊まらなければなあ。それにしても淋しい道やな。今日はまだ誰にも出会うてないなあ。」

呉服屋の旦那さんは、こんな事を考えながら歩いておりました。

どれほど歩いた頃でしょう。少し道が広がった所に出てきた時です。

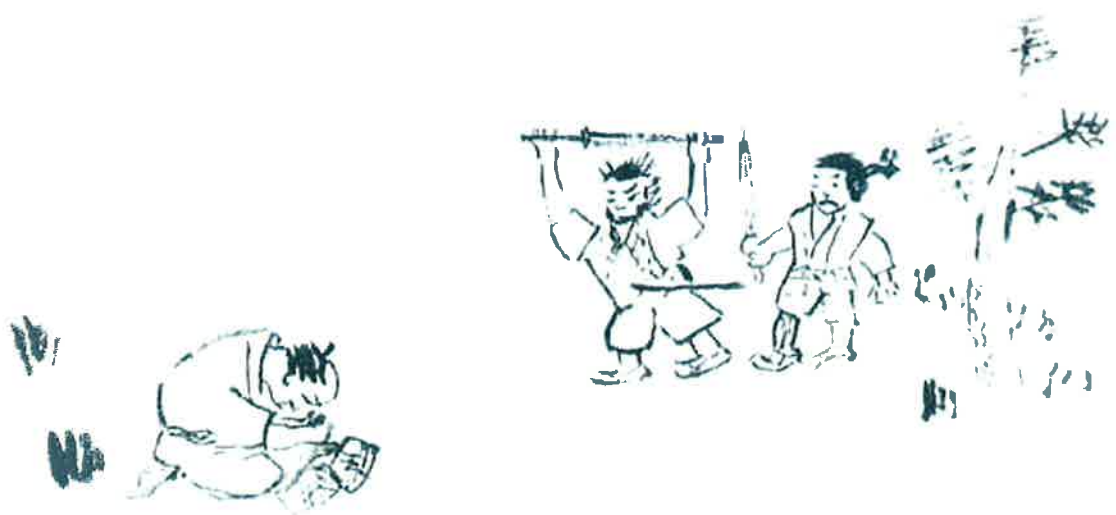
「やい、待て。」

四、五人の男たちが手を広げ、バラバラッととび出して来ました。手には棒や刀を持ち、顔ときたらひげもじゃの、何ともいえない恐ろしげな者たちです。

「ヒャー 山賊や。おたすけを……。」

「やい、おれたちに、その荷物とふところの金を渡せ！」

「これは、大切なお金、これがなければ着物が買え



ません。どうぞお見逃しを……。」

呉服屋のだんなさんは、何度も何度も頼みました。でも、山賊たちは無理やりお金と荷物を取り上げ、

「たんまり入っているぞ。上々のかせぎだ。おい

おやじ、命がほしければ、とっとと逃げていけ！」

と、言うなり、刀を振り上げました。

「ヒャー、助けてくれー。」

呉服屋のだんなさんは、あとも振りむかず一目散に逃げだしました。

又ある時は、お父さんと男の子の二人連れが、丹波のおばあさんに出会いに行くために、この道を歩いておりました。

ちようど岩がつきでいて、足場も悪く、旅をする人の難所になっている所に、さしかかった時です。

「あっ、おっとう、足が痛え。」

「たる吉、どないしたんや、大丈夫か。」

「おっとう、足くじいてしもうた。痛えや、痛えや。」

「わあ、えらいはれてきたなあ。痛いやろう、わらじのひもも切れとるし、こらえらいこっちゃ。そうや、水汲んできて冷やしたるさかいにな、動いたらあかんで。ええか。」

「うん、おっとう、氣いつけてな。」

お父さんは、岩に足を用心深くかけながら、水の流れている谷へと、下りて行きました。

そして、手ぬぐいを冷たい谷川の水でぬらし、腰に下げている竹の筒に水を汲んで、上ってくると、たる吉の足に手ぬぐいを巻いてやりながら、

「たる吉、氣持ちええやろ。もうちょっとしたら、少しははれがひくからな。そうや、水飲むか。つめとうておいしいで。その間にわらじのひも、直したるわ。がんばりの木があったから、その皮をとって来たんや。これやったら強いよってにな。」

お父さんは、たる吉のわらじのひもを、がんばりの皮で直してやりました。

「たる吉、痛いのは治ったか。」

ある。そこへ旅する者たちの安全を祈って、地藏尊を彫るがよい。」

と言われたかと思うと、スーッと消えていかれました。

はっと目を覚まされたお坊さまの枕元に『ノミ』が置かれていました。

「夢ではなかったのだ。さあ、こうしてはいられない。」

お坊さまは、身仕度を整えると、お告げのあった所へ急ぎました。

「ここだ。」

そうつぶやくと、ろうそくの灯とお月様の照らされる光をたよりに、

キーンコーン キーンコーン

と、岩肌を伝うさまのお姿を彫り込んでいきました。

キーンコーン キーンコーン

額から、身体から、汗がボタボタ流れおちていきました。

キーンコーン キーンコーン

その汗を拭こうともせず、一心にお経を唱えながら、ノミをふるっていきました。

キーンコーン キーンコーン

ノミをふるうお坊さまの手には、血まめができ、その血まめがつぶれて痛々しい程です。

でも、東の空がほんのりと明らんできはじめて頃、お地藏さまが彫り上がりました。

そのお地藏さまのお顔は、まるで旅をする人にはほえみかけておられるようでした。

お地藏さまにお経を上げた後、法道仙人は、そつと旅立って行かれました。

朝になって目を覚ましたやすけいさんは、お坊

さまがおられないのに気付き、村はずれまで追いかけて行きましたが、もう、お姿は見当たりませんでした。

あきらめて引き返そうとした時、ふと目を止めた

岩に、見知らぬお地藏さまのお姿を見て、やすけじいさんは、

「これはあのお坊さまが……、そうか、ゆうべ聞こえていたノミの音は、きっとあのお坊さまが、お地藏さまを彫り込まれていた音だったんだ。わしの話を聞いて、お地藏さまを彫って下さったにちがいない。ああ有難い。」

早速、やすけじいさんは、花と線香をお供えしました。

この事は、人の口から口へと伝わり、すぐに村中に広がっていきました。

村人たちは、いろいろなお願いごとをするために、毎日お地藏さまにお参りし、願いごとをかなえていただきます。

又、旅をする人たちは、このお地藏さまの前に手を合わせ、旅の安全をお願いしてから旅立つようになりしました。

すると、不思議なことに、けがをする人も山賊に襲われることも、道に迷う人もなくなりました。

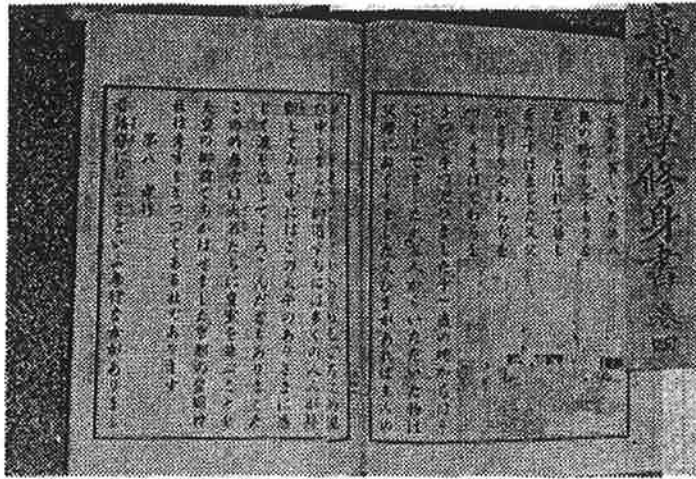
今でも、一の瀬のお地藏さまには、花や線香の香りが絶えることがないそうです。

新修加東郡誌

▼三草村のふさ

——孝——女——

「昔、播磨におふさという孝行な女がありました。家が貧しいため、八歳の時から、子もりなどにやとられて、暮しをたすけました。又父がざうりやわらぢをつくるそばで、わらを打って手つだひました。十一歳の時から、ほうこうにでましたが、主人からいただいた物は父母におくりました。又ひまがあれば主人のゆ



小学校修身教科書巻四より

るしを受けて家にかへり、ねんごろに両親に仕へました。」

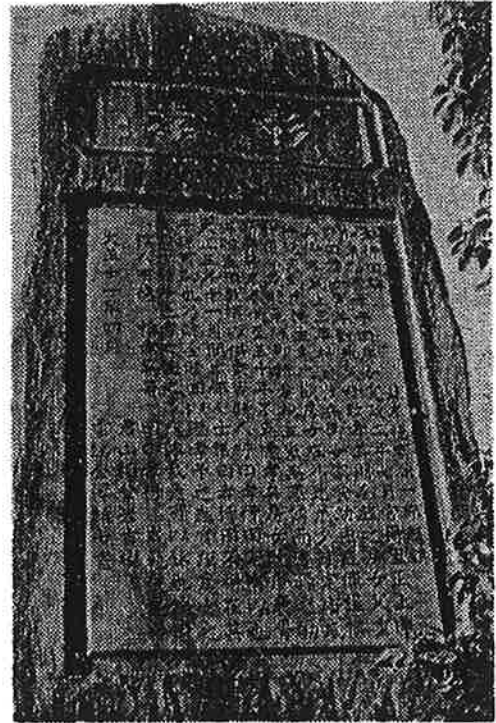
以上は、明治の末期より大正、昭和にかけて全国で使用された小学校修身書巻四の第八孝行のほぼ全文である。ふさの幼時の孝養ぶりを取り上げ、一般児童の模範としたものである。

ふさは加東郡社村（現社町）在住の十兵衛の子として生まれた。六歳の時、上三草の茂兵衛の養女となった。茂兵衛は、田畑を持たぬ貧しい小作百姓であった。ふさは、八歳のころから、近所の子供の守や、使い走りなどをして家計を助けた。九歳ごろには、年老いた父親が、ぞうり、わらじ作りに励んでいるのを、少

しでも助けようと、いつでもそばでわら打ちに励み、また、できたわらじ、ぞうりを旅人に売るなどして手助けに励んだ。父が山に柴刈りに行き、帰りが遅いと、必ず途中まで出迎えて手助けをしたという。

一一歳の時から三〇過ぎまでの三〇余年、あるいは三年間、時には四年、一〇年間と他人の家に奉行に行き、どの家といわず、誠心誠意仕事に励み、その陰ひなたのない働きぶりは、近在で評判となった。働いて得た給金は、ほとんどそのまま両親に送り、生活の助けとした。奉公の暇をみつければ、主家の許しを得て両親のもとに帰り、身の廻りの世話につとめた。

天明五年（一七八五）、父が病の床に伏すようになってから、ふさは、毎日のように勤めを終えてから、夜道を看病に帰宅した。近隣の



ふさの彰徳碑

人たちは、その孝養ぶりに驚嘆したという。

父は、ふさに向かつて「せっかく養女として来てくれたこの家が貧しいため、幼い時から他人の家に勤めに出したが、親を恨むような様子は何一つ見せぬばかりか、主を持つ身でなかなか自由がきかぬのに、将来なんの役に立ちそうもないこの病弱の私の身を案じてくれるやさしい心遣いには、いまさらお礼のことばもない。ただお前の行く末の幸せを神仏

に祈るだけである。」と涙を流して喜んだ。そして、間もなく父は世を去った。ふさの悲しみようは、はた目にもいじらしく、ふさは、「せめて、着物を新調して着せたいもの」といろいろと苦労した。当時のこととて、およそ死人に新調の着物を着せることなど、およびもつかぬことであった。人びとは、「そのやさしい気持ちだけで、きつと亡父も満足するだろう。」となくさめ、ふさを思いとどませるのに苦労したという。

ひとり暮しとなったふさの母は、綿をつむいで暮らしをたてていたが、年老いて仕事も思うようにできなくなり、ふさの仕送りに頼るようになった。

天明七年（一七八七）かの有名な天明の飢饉きんがあり、ふさの給金は差止めとなった。ふさは、いくらもない自分の着物を質に入れ、母にひもじい思いをさせぬようにした。母が老衰で炊事が出来ぬようになると、朝夕、主家より馳せ帰り、食事の面倒をみるなど、なくさめ励ました。母が持病のしゃく（胃部の激痛）で

苦しむ時は、夜ごとに介抱につとめ、しかもその間、主家の用を欠かすようなことは、何一つなかった。

このように、親に仕えて孝、主家には忠節の誠を尽すことが、庄屋を通じ、領主丹羽侯に聞こえ、寛政二年（一七九〇）二月、異例のほう賞を受けた。

大正十一年（一九二二）には、ふさの養家の跡に、蘇峰徳富猪一郎の筆になる「彰孝」の碑が建立され、当地方の名跡に数えられている。